

チミリヤーゼフ名稱モスクワ農業大學

—その歴史と現状—

丸 毛 忍

(一) ソ連の學問や學界のことはわが國では未だいくらも知られておらない。農業關係でも事情は同然であると云えよう。

チミリヤーゼフ名稱モスクワ農業大學^{アカデミヤ}は一九四〇年に創立七十五周年を迎えた。當時記念出版の企てがあつたが、戦争に災ひされて實現せず、一九四六年になつて漸くその一部のみが「K・A・チミリヤーゼフ名稱モスクワ農業大學」と題して公刊された。筆者は最近披見の機会を持つたが、良質紙を使用し多數の寫眞を含む大型三九〇頁の豪華版で、統計學者として有名な現學長V・S・ネムチノフ教授の監修にかかり、内容は同教授の「七十五年」(八頁)、L・L・ペラシヨフの「K・A・チミリヤーゼフ名稱モスクワ農業大學—歴史的概観—」(一四六頁)の二つの論文と、各講座の歴史的概観(二二六頁)からなつてゐる。

モスクワ農業大學はソ連において最も古く、最も有力な農業教育・研究機關であり、今日まで幾多の著名な學者を輩出し、行

政方面においてもソ連農業の最高指導者の過半が同大學の卒業生からなつてゐる。だから、モスクワ農業大學の歩いて來た道は、七十五年にわたる近代ロシアの農業生産における諸變革を反映しており、同時にまた同國における農業關係諸科學の發展史であるともみられよう。かかる意味で、消息を知る手掛りの乏しいソ連農業學界についても若干の展望を與え得るものと考えられる。本資料について紹介の筆をとつた理由も一つにここにある。

だが、資料の性質上、大學機構の變遷についての記述が中心になり、われわれの最も知りたいと思う同大學の研究成果、教授の學說の内容、これらに對する評價などは至極簡略にすまされ、且つ大學外の學界一般の動向について全く觸れられていないことは一應止むを得ないとしても、ロシアの農業關係諸科學の發展に強い影響を與えたドイツはじめ諸外國の科學との關係が全く無視され、一學派をなした程の學者であつても、政治上の犯罪に問われたような者の業績は悉く抹殺されてしまつてゐる點は、われわれにとつて不便である。が、以前はマルクス主義者の論難的であ

つた革命前のブルジョア學者の業績については、その進歩的側面を出來るだけ認めようとする努力もみられなくはない。なお、一九四〇年以後、すなわち戦時および戦後の大學の活動は七十五周年記念出版たる本書の取り扱う範圍外である。本資料に缺けている部分については、他の資料によつて補足しつつ、モスクワ農業大學の七十五年の歴史と經濟關係網の内容について、以下簡単に記してみよう。

モスクワ農業大學は七十五年の間に、大變遷の時期を經過した。第一の時期は一八六五年から一八九四年に至るペトロフ農林大學時代で、貴族地主經營への奉仕が大學の主要な任務であつた。第二の時期は一八九四年から一九一七年に至るモスクワ農業專門學校時代で、地方自治體の農業指導者の養成が重視された。革命前のこの二つの時期を通じて、われわれは資本主義の自生的な發展の行われなかつた、自由なきロシアの大學の苦悶に觸れるであらう。第三の時期は一九一七年から二〇年代にかけてのモスクワ農業大學のアレクサンダー化の時代であり、古い傳統を誇る大學がどのようにして革命に適應して行つたかがみられる。第四の時期は一九三〇年代の社會主義農業の時代で、コルホーズ、ソフホーズとの協力、農業生産との緊密な結びつきが、大學の主要な任務となつた。われわれは、新しい社會的條件の下で、漸く外國模倣の域を脱して、眞に國民的な農業諸科學の創造されて行こうとする生々しい姿に接するであらう。

(二)

ロシアの大學は殆ど全部一九世紀に入つてから設立され、教授も最初は外國人、殊にドイツ人が多く、外國留學から歸つたロシア人が徐々にこれに代つた。ペトロフ農林大學はロシア最初の農業大學として一八六五年モスクワ郊外のペトロフスコエ・ラズモフスコエに設立された。その當時は外國人教授の數はよほど減つていた筈であるが、設立當初の教授は外國留學生が大部分を占め、恐らくドイツの學風に學ぶところが多かつただろうと想像される。現に有力な教授の一人P・A・イリエンコフはリービツヒの弟子であり、リービツヒは大學の開校を祝う手紙を彼のもとに寄せている。

一八六一年の農奴解放の結果、地主經營の置かれている條件、殊に勞働力獲得の條件が變化したので、新事態に即して經營を改善し、また農民の經營が地主の壓迫を受けて零落するのをある程度阻止せねばならなかつたこと、及び農業官吏養成の必要などがツァー政府をしてペトロフ農林大學を設立せしめた主な理由であつた。

ペトロフ農林大學は「農業および林業に關する知識の普及」を目的とし、三年制がとられ、一五の科目について講義が行われた。入學の資格等には何等の制限も設けられず、講義への出席も自由で、試験は學士號の獲得を希望するものにのみ課された。このような自由な學制が施かれた理由は、初代學長N・I・ジェレ

ズノフの言によれば、「青年に農業高等教育を授けるのみでなく、地主や官吏、他の大學の卒業生などに彼等に不足している農業知識を與えることか、急務たつたからだ」と云う。初期の教授には先のP・I・イリエンコフの外に、K・A・チミリヤーゼフ、後のロシア農學の代表者I・A・ステブウト等がいた。

一八六〇年代はロシアにおいて人民派の著作家達が最も華々しく活躍した時代であり、人民主義の運動は一八七〇年代に最高潮に達した。この影響を受けて多くの大學に學生騒擾が頻發し、ペトロフ農林大學の學生達の間にも反對派的な氣分が漲つていた。一八六九年にはネチャイエフ事件に關係のあつた聴講生イワノフが大學の構内で慘殺され、翌七〇年には經濟學の教授シチエギンと農場長ネルチエフがゲルツェンに關する追悼文を新聞に發表して大學を追われると云う事件が起つた。

その結果、政府はペトロフ大學の解放の中止を希望し、一般の輿論もその自由な學制に對して著しく批判的となつた。學校當局も亦、學生の大部分が出席常なく、最初の七年間に學士號を得た者は、後に大學の農業經濟學の教授となつたA・N・シーシキン唯一人にすぎず、聴講生の三割が農業に全く關係のない職業に従事すると云うような實狀に省みて、從來の學制に疑問を抱くようになつた。

一八七二年ペトロフ大學は「青年に農業および林業に關する教育を授けることを目的とする高等學校」に改組された。四年制に延長され、主として中學卒業生を收容し、進級や卒業の際には嚴

格な試験が課されることとなつた。それとともに必然的に學長の權限は強化され、學生に對する監視は嚴重となつた。

一八七六年には、後に人民派の作家として有名になつたV・T・コロレンコや後の農業經濟學教授K・A・ヴェルネル等が學生代表として、大學の現秩序に對する不滿を表明する宣言書を校長に提出する事件が起つた。これは明かに「人民の中へ」運動の影響を受けたものであつた。時の農務次官のレーグエンはただちにモスクワに現れ、閉校をもつて威嚇したと云われる。その後も學生の間には人民主義運動との關係が絶えず、一八七八・七九年度には學生の募集を停止したほどであつた。

一八八一年のアレクサンドル二世の暗殺とともにロシアは反動期に入つた。ペトロフ大學でも眼科醫E・A・ユングが學長に就任し、上からの學制改革に着手した。ユングの改革案は先ず大學の自治を有名無實ならしめることにあつた。彼の案によれば、學長はツァーリによつて親任され、大學のあらゆる問題に對して全權を握り、教授會その他の權限は甚しく縮小されて、學長の單なる諮問機關になる筈であつた。ユングが就任する少し前から學生監が置かれていたが、彼は更に全學生を強制的に寄宿舎に收容しようとして計畫した。また彼は、教授の多くが自然科學、歷史科學の研究に基いて出来るだけ廣く農業教育を行うことを主張したのに反對して、大學の教育を農業プロバの學問に限定し、實習に重きをおく方針を押しつけようとした。そのため、林學部は一八八三・八四年度から學生の募集を停止した。教授は一部を除いてユン

グの改革案に反対であり、長い間討論が繰返された。

しかし結局一八九〇年にはユングの案に基く新しい學則が實行に移されることになったため、同年の初めから學生の間には反對運動の波が昂り、遂に彼等は新學則の一部廢止から然らずんばユングの退職を要求した。次いで一五〇名もの學生が逮捕されると云うような事態が生じ、大學は閉鎖され、ユングは辭職した。當時ペトロフ大學には、十三人の教授、七人の助教授および講師、十、七人の助手がいたが、彼等も漸時大學を去り、一八九二年には熱烈なダーグイニストとして二〇年にわたりペトロフ大學の學問の確立のために努力し、常に進歩的な學生を擁護して當局や反動教授と闘い、「官費をもつて神を自然から追放する」者と云われたK・A・チミリヤエフも教職を辭さねばならなくなつた。ペトロフ大學は一八九四年二月正式に廢校と決した。

ペトロフ農林大學は貴族や地主の子弟に入學に當つて優先權を與えていたが、かかる層の出身の學生は漸減して、一八九〇年頃には官吏、小市民、商人の子弟が學生の六五%に達していた。ペトロフ大學は創立から廢校までの間に農學部八六〇名、林學部三二五名の卒業生を世に送つた。一八九四年の調査によると、卒業生のうち一一一名が地主の所領を管理し、一〇七名が林業に従事し八八名が教職にあり、七七名が自ら農業經營を行い、五六名が地方農業技師として働いていることが判明している。

(三)

チミリヤエフ名稱モスクワ農業大學

一八九四年の六月ペトロフ大學の跡にモスクワ農業專門學校が設立された。同校の學制は先の眼科醫學長ユングの案を殆どそのまま取り入れたものであつた。學校は農學部と農業工學部に分れて四年制を採用した。

舊ペトロフ大學の教授で專門學校の幹部として残つたのは、最初、化學のE・B・シェーネ一人であつたが、設立後六年の間に舊ペトロフ大學の講師、助手、學生併せて二四名が教職についた。當時は講義の際に學生監や係員が臨席するような状態であつた。

學生は全部寄宿舎に收容され、會合を持つたり、團體を組織する自由を奪われた。學生には人民主義者の後身で農村により多く地盤を持つ社會革命黨や立憲民主黨を支持する者が多かつた。

ペトロフ大學およびモスクワ農業專門學校はその存立の期間に僅か十回の學位請求論文を審査しただけであつた。提出論文は農業經濟關係四、農學關係三、畜產關係三であつた。專門學校はその屢々なる要求にも拘らず、學位授與の權利が認められなかつたので、舊ペトロフ大學卒業生の三つの論文を審査したにすぎなかつた。この問題は十月革命の時まで解決されないうままに終つた。

一九〇五年の第一次ブルジョア革命は、モスクワ農業專門學校をも全般的な騷擾の渦中に捲き込み、授業は長期間に亘つて停止され、遂には同校にも軍隊が派遣されると云う事態を生じた。しかしこの結果、學校の自治が回復され、進歩的な學制改革が實施されることとなつた。また革命に續くストルイピンの土地改革は

ロシアの農業における資本主義の發展を押し進め、同校の卒業生達が多く地方自治體において農業指導に従事するような事情を創り出した。

一九〇五年以後、モスクワ農業專門學校は農務省から若干の獨立性を取戻した。評議員會は再び正常な機能を發揮し始め、學校の運営には選舉制が取り入れられ、新しく校長と次長が教授の中から選任された。學生監の制度の如きは勿論廢止された。またユダヤ人や妻帯者に對する入學制限も解除され、女子に對してもある程度聽講の自由が許された。學生達は強制的な寄宿舎生活から解放された。

この時期には農業幹部の養成を専門化するために、既存の學部は更にいくつかに分割された。これは各部門の學問が發達し研究を細分化する必要が生じたこと、並びに高等教育を受けた農業專門家に對する需要が増加したためであつた。モスクワ農業專門學校は従來農學部と農業工學部に分れておつたが、農學部は一九〇八年裁増、畜産、農業經濟の三學科に分けられ、次いで一九一三年に栽培學科は六つの學科に細分された。農業工學部も一九一五年には土地改良、農業土木、農業機械の三學科に分けられた。また一九一三年には新しく水産學部が設置された。

これと並んで、實驗・實習設備が著しく擴充され、學校の研究活動は大いに強化した。例えば、化學肥料、土壤、植物病理、育種、畜産、機械等の研究室や試驗所、農場、圖書館等が新設或は擴充され、ステプウトやチミリヤーゼフが永い間空想していた

講座と専門の實驗・實習設備との結合が初めて全般的に實現された。だが遅れた、零細農の多いロシアの農業に學校でなされた優れた研究成果を浸透させる可能性は殆どなかつた。なおロシアには大學や專門學校以外の研究機關は皆無に近かつたから、科學や技術の發達は學校を抜きにしては全く考えられなかつた。

教師の定員も、一九一三年には教授二名、助手一六名から教授三〇名、講師九名、助手四〇名に増員され、講義も學年制から單位制に改められた。

學生の数は各學年六〇—七〇名であつたのが、一五〇—二〇〇名に増員された。一九一四年の調査によると、回答した學生三二九名のうち、三〇％は農村と何等の關係を持たず、四七％は兩親が土地を所有しなかつた。また土地を有する者の三八％が農民層に屬していた。妻帯者は學生の一五％を占めておつた。入學の目的については五一％が國家乃至地方自治體の農業活動家になるため、二七％が學問への興味と答えている。モスクワ農業專門學校は一九一五年までに農學部一五三八名、農業工學部七五五名の卒業生を送り、一九一八年以前の合計は一八三九名に達した。當時の卒業生の大部分は地方自治體の農業組織で活動した。

一九〇七年頃から學生の間の色々な研究會や團體の結成がぼつ／＼公認されるようになった。一九〇五年以後學生は從來支配的であつた人民主義に幻滅を感じ、その急進的な部分は社會民主黨の組織に加つていたと云われる。

一九一〇年カツンが文部大臣になるに及んで、學問の自由に再

び壓迫が加えられ初めた。一九一七年の二月の第二次ブルジョア革命とともに、助教や若い勤務員、學生總代會議などの間に再び學制の民主的な改革の氣運が動き出し、モスクワ農業專門學校はベトロフ農業大學と改稱された。

(四)

十月革命は新しい社會主義的原理に基づくベトロフ農業大學再建の任務を課した。問題の困難さは、大學の管理制度を改革し、學生をプロレタリア化し、マルクス・レーニン主義の方法論に基づいて社會主義農業の諸條件に適應するように研究や講義綱目を一新せねばならない點にあつた。大學内でその遂行の任に當つたのは評議員會および黨組織と各種社會團體であつた。

大學は從來農務省の管轄下にあつたが、一九一七年教育人民委員部に移管され、主として職業技術教育委員會が直接監督を行つた。

一九一九年一月には十年以上勤務する教授および講師の全國的な改選が行われたが、モスクワ農業大學では二八名の教授、八名の講師の舊スタッフがそのまま留任した。

舊來の學長や評議員會では到底革命後の新事態に處して行けなかつたので、一九一八年の二月から助教、助手、學生、職員組合の代表者が大學の管理に参加した。これは同年夏のロシア大學法によつて確認せられた。一九二〇年夏には事務の能率化を計るために、革命的三人委員會——教師二名、革命的學生代表一名

からなる——に學校管理の全權が與えられた。事態の安定とともに、やがて革命直後に擴大された大學の自治に對して種々の制限が加えられるようになり、學長は權威と責任を回復し、學長や管理委員は大學の選出した候補者の中から任命され、また評議員會には教育人民委員部の代表が参加して強力な指導監督を行うようになった。

教授達に最初から革命に對して協力的であつたわけではない。しかしベトロフ農業大學は自然科學關係の講座が多かつた關係で教授達は大部分留任した。ソグエート當局もこれらの簡單に掛替のない専門家を活用して農業を再建する必要があつたので、厚遇したものと思われる。そのうちに教授達も新しい事態に慣れ、漸くソグエート政權に協力するようになったのである。法文系統の大學では教授の追放された者も少なくなく、且つマルクス主義に基づき各課目の講義案の作成にも時間を要するので、一時講義を廢してしまふような場合もあつた。モスクワ農業大學の二十年代の教育目的は、農業專門家と農業技術師の養成ならびに農民に對する知識の普及に置かれていた。

ベトロフ大學は一九二三年K・A・チミリヤエフ名稱農業大學と改稱された。

革命後は學生が大學の管理や改革に積極的に参加するようになったが、一九一七年に出來た「學生總代會議」は學生層のプロレタリア化や労働者豫料の設立に反對したので、一九一九年に教育人民委員部の命令で解散され、その後は共產黨員の學生が組織の

中心となつて活動した。學生中の共產黨員および候補の数は一九二一、二二年には全體の二四％、一九二七年には三六・三％、青年同盟員および候補三七・四％を占めていた。

教育人民委員部は一九一八年の法令によつて、十六歳以上のあらゆるソヴエート市民に自由に高等教育を受ける權利を賦與し、一切の入學試験を廢止した。その結果、モスクワ農業大學においても學生數は一躍數倍に増加し、收容設備その他がこれに伴わず様々の混亂を起したが、學生の大部分は講義を理解することが出來ず、間もなく大學を去つてしまつた。一九二〇年にはかかる行き過ぎを是正して入學試験が課されることとなつた。これと並行して労働者豫科が置かれ、大學入學を希望する労働者、農民に對して三年乃至四年の過程で準備教育が授けられた。

一九二六年には大學に四一の民族からなる三六〇〇名の學生がいたが、その内四三％は農民、三三％は勤務員およびインテリゲンチヤ、二四％は労働者の出身であつた。婦人學生は常に三割内外を占めていた。

學制も屢々變更された。農業教育の総合的な性質を強調する意見と専門的な職業教育を支持する意見とが常に對立した。一九二八年には大學は次のように分れてゐた。農學、農業土木、農業機械、コルホーズ、ソフホーズ、水産の六學部と、労働者豫科、農業教員養成所。最初は三年制であつたが、一九二五年から四年制に改められた。労働者豫科の設立については教授の大部分と學生總代會議は反對であり、教室や研究室の利用等についても種々の

制限を加えた。ウィリヤムスのみが最初から協力的であつたと云われる。豫科の教師は助教、助手級の人が多く、一九二三・二四年にはその二四％が黨員であつた。労働者豫科の卒業生は優先的に大學に入學することが許された。労働者豫科は一九三八年まで存続した。

二十年代の教育の困難は、學年が短縮されたにも拘らず、共通な理論的な科目と専門科目がともに増加し、實習、殊に生産實習が重視され、その上政治的な諸科目の講義をも行わねばならない點にあつた。

一九二九年春には十年以上勤続する教授、七年以上勤続する講師の改選が行われた。その際大學のすべての社會團體が賛意を表した者は無競争で講座を繼續することが出来るので、他の者についてのみ選挙が行われた。その結果教授三五名、講師七二名の古顔と並んで、新しく三人の教授と若い助手及び實習者を含む一七人の講師が選ばれた。

(五)

一九三〇年代には農業の全面的な集團化の實施によつて、農業部面においても社會主義的な生産諸關係が確立された。チミリヤーゼフ農業大學の教育や研究の方針もこの線に沿つて再組織せられた。大學は大規模な社會主義農業に奉仕すると云う目標を明かにし、大學とコルホーズやソフホーズの農業生産との結びつきは更に強化された。

しかし農業の全面的集團化のような間期的な社会主義的政策を實施するには、學界においてもこれに反對する説をなす者を一掃せねばならなかつた。チミリヤーゼフ大學でも一九二七年にはトロツキストを追放した。また一九二九年十二月大學の黨組織の清掃が行われた際、主として農業經濟學部の教授達からなる動勞農民黨の中樞の存在が暴露された。一九二九年頃にも反マルクス主義的な教授が大學で講義を行つていたことから解るように、學界のソヴエート政權に對する協力は決して急テンゴには進まなかつたし、當局のこれに對する態度も極めて慎重であつた。例えば舊學士院がソヴエート政權の容赦を頑強に拒否したのに對し、政府はこれをそのまま存置せると同時に、マルクス主義學者によつてコム・アカデミーを設立、これに對抗した。マルクス主義學者が舊來の學士院の會員に加つたのは一九二九年が初めてであり、コム・アカデミーが舊學士院と合體するには一九三六年まで待たねばならなかつた。

チミリヤーゼフ大學は一九三〇年教育人民委員部から農業人民委員部へ移管された。これも亦大學の生産への接近を意味するものであつた。三〇年代の前半には、農業の全面的集團化に答えて多數の農業技師を急速に供給するために、教育の極端な専門化が行われ、その結果、大學の各學部から多數の専門學校が分離した。この行き過ぎは漸時は正されて、一九三六年頃には、略現在の機構が出来上つた。

チミリヤーゼフ農業大學は現在、農學、畜産、農藝化學・土壤

チミリヤーゼフ名稱モスクワ農業大學

園藝、農業經濟の五學部と農業教員養成所及び通信教育部を持つており、四九の講座（教育學、外國語、軍事教練、體育を含む）が設置されている。

大學の指導については學長が最高の責任を負う。わが國の教授會に當る評議員會には學内の黨、青年同盟、勞働組合の代表者が參加することになっているが、その數は明かでない。學生團體は多數活動しているが、今日では學校當局への協力が主なる目的となつておる。

現在（一九四〇年）統計學者のV・S・ネムチノフが學長の地位にあり、學務主任はN・V・ウイリヤムス教授、研究主任はM・M・ソコフ教授、農學部長M・K・ペロシヤブコ助^{アシスタント}手、園藝部長はA・F・グエルトゴルドスキー教授、農業化學・土壤部長はA・G・シエスターコフ助教授、經濟部長はI・N・ネトラソフ助教授、畜産部長はV・O・ウイツテ教授である。教授五三名、助教七一名、上級講師二八名、助手および講師一〇一名合計二五三名のスタッフを擁している。

施設としては、各種試験所、演習林、農場、博物館、五四萬卷の藏書を有する圖書館等がある。

修業年限は五年である。一九四〇年七月一日現在の數字によれば、學生總數一九三六名のうち、婦人が一〇七三名で男子を凌駕している。學生のうち一七五八名が黨員、青年同盟員或はそれらの候補であつた。出身別をみると五五九名が労働者およびその子弟、四四〇名がコルホーズ農民およびその子弟、残りがインテリ

の子弟であり、四一の民族からなつていた。

舊ベトロフ大學が五二年間に三〇一八名の卒業生を出したのに對し、チミリヤーゼフ大學は二三年間に七四七九名の農業専門家を送り出した。今日卒業生は中央および地方官廳の農業關係部、學校、研究所、M・T・S、ソフホーズ等に勤務しているが、直接コルホーズで働いていると云うものは未だ極く少數のようである。しかし彼等は今日ではもう當ての零細な個人經營の消極的な相談相手、或は單なる農業知識の宣傳者ではない。科學的な農業知識に基いてコルホーズ労働の生産性を高めることが彼等の目標であり、大規模な社會主義的農業生産の積極的な組織者、指導者となつていくと云うことが出來よう。

チミリヤーゼフ農業大學は農業の全面的集團化の際には多數の學生を派遣協力せしめたし、またそのために派遣される黨員の農業教育を行つた。その後も常にコルホーズと協力して各種の研究を進め、農々生産實習を兼ねて學生をコルホーズに送り、これを援助している。またコルホーズ農民のための講習會を毎年大學および現地において開催し、農業知識の普及に努力している。

チミリヤーゼフ農業大學は今日までに二六六冊の教科書を編纂したが、そのうち、ウイリヤムスの「土壌學」、ブリヤニシニコフの「農業化學」、ブリヤニシニコフ、ヤクウシキン共著の「栽培學」は、いずれもソヴエート農學者必讀の書となつてゐる。

チミリヤーゼフ農業大學の卒業生の中には、現在同大學の中核をなしている多くの學者の外に、農業人民委員代理I・A・ベネ

デクトフ、ソフホーズ人民委員P・D・ロバノフ、黨中央委員會農業部次長N・V・イツコフ、ロシア共和國最高會議幹部會副議長I・A・ブラソフ、ロシア共和國人民委員會副議長A・V・トリツェンコ、ゴスプラン副議長S・F・デミドフ等の著名人があるが、革命後は他に多數の農業大學や研究機關が新設されたので、その農業教育および研究における地位は當ての如く獨占的なものではない。ロシアにおいても農業關係の教育機關は單科の大學、專門學校の方向をとつて發達し、農業科學アカデミーなども連邦學士院の構成からは一體獨立している。

(六)

ロシアの農業經濟學文獻について、われわれはリヤンチンコの「農業經濟學」(直井式夫譯)第一章の簡單な記述以外には、殆どこれを知る手掛りをもたないのであるが、その中でリヤンチンコは次のように述べている。

「ロシアの農業經濟學者の一層舊い代表者達(フリユードジンスキー、リュドゴフスキー、シーシキン、部分的にはスクヴオルツォフでさへ)は、チヤーおよびチーニョンの方法と構成とに接近し、更に彼等を通じて古典經濟學派の方法と構成とに接近していた。しかるにロシアの新しい流派は、他の經濟學上の諸流派、すなわち主觀的、心理學的、倫理學的經濟學派との間に、理論上および方法論上の類似を有つてゐる。新しい流派に屬するのはチヤーノフ、チエリンツェフ、マカロフ等である。この引用から判明す

るように革命前のロシア經濟學の流れには新舊二派があり、ともにドイツ農業經濟學の影響を通じて經營學的な構成を持つと同時に、舊派は古典學派の、新派すなわち新人民主義派はオースタリイ學派の理論を取り入れておつた。新派は革命後も二十年代の終り頃まで可成りの勢力を保ち、殊に農業の全面的集團化に反對して富農的な農業發展の道を主張し、黨ならびに政府の政策に鋭く對立した。マルクス主義經濟學は前世紀の八〇年代以來ロシアの經濟學者に強い影響を興えておつたが、農業經濟學の領域では歴史的なドイツ學派の影響とその私經濟的な性格からして、まとまつた一派を形成するほどの力とはならなかつた。農業經濟學においてマルクス學派が支配的となり、農業集團化の進展にともなう新しい現實と取り組んで、體系的理論的な勞作の出現を期待し得るようになったのは、漸く一九三〇年代のことであつた。

かかる要請に答えたものがリヤシチェンコの「農業經濟學」である。彼は「主としてドイツの學問である農業經濟學」が「私經濟的內容、方法、および經營組織上——生産上の任務を有する學科として取り扱われ」、且つ「何等系統的に構成されず、また何等明確な研究方法に従つていない」ことを批判し、農業經濟學を「理論經濟學の特殊部分」として、マルクス主義の立場から構成しようとして試みた。彼の體系は次の如きものである。すなわち、(一)農業理論社會經濟學、(二)農業經濟學、(三)農業政策、(四)應用的私經濟的諸分科—農業組織學、(五)農業企業組織學、(六)農業評價學、(七)簿記および會計學。しかし彼の體系の包括する範圍はその「農業經濟

學」においては資本主義農業に限定され、ソヴエート農業の研究は「過渡期のソヴエート同盟の全體系的豫備的な一般的理論的構成」が未だないので、「ただ個々の問題の提起」のみに限られてゐる。

その後ソ連の農業經濟學は、社會主義的農業生産の發展に伴い政策的研究やコルホーズの組織學的研究については可成りの成果を收めたが、リヤシチェンコの體系の核心である理論的な部分については、未だ見るべき業績を示しておらない。

註 ソヴエート農業經濟學の問題點については楊德造氏「ソヴエート農業經濟學の發展」(季刊「理論」七號)を参照されたい。

リヤシチェンコの擧げている新舊兩派の農業經濟學者のうち、リニドゴフスキー、シーシキン、スクヴォルツォフ、チアヤノフはモスクワ農業大學の教授であつたし、また彼がロシアの「農業經濟學の體系的構成および研究は、ドイツにおけると同様に、高等農業學校の授業と密接に關連しておる」と書いてることからしても、モスクワ農業大學がロシアにおける農業經濟學發展の中心であつたことは想像に難くない。だとすれば、モスクワ農業大學の經濟關係講座の歴史的意見は、上述したロシアおよびソ連における農業經濟學の發展を裏書きする若干の資料を提供することとなる。

經濟學および農業經濟學講座、ペトロフ大學の創立と同時にM・P・シチエバキンが經濟學の講座を擔當し、一八七〇年ゲルツ

エンの追悼文事件で職を去つたが、彼の立場は人民主義的なものであつたと想像される。

農業經濟學の正式の講義は一八七〇年A・P・リユドゴフスキーによるものが最初であつた。彼はドイツに學び、歴史學派の影響を受けて折衷主義的な立場をとつていたが、人民主義者と親しい關係にあつた。彼の農業經濟學は、(一)農業經濟學(農業生産の場所、時期、形態を決定する條件の研究)、(二)經營組織學、(三)總記の三部に分れてゐたが、農業經濟學と稱する部分は組織學の序論以上になつた。彼の著書には「農業經濟學及び農業總記の原理」がある。

一八七三年から九二年までI・I・イワニウコフが經濟學と統計の講義を行つたが、彼の學説はマルクスに學ぶところが多かつたと云われる。ナミリヤーゼフが一八六七年(資本論の出版年)化學の教授P・A・イリエンコフの書齋でマルクスの「資本論」をみたとか、また一八八三年ベトロフ大學の學生はマルクスの死に際してエンゲルス宛の弔電を送つたなどのエピソードが傳えられる程に、ベトロフ大學にもマルクス主義が浸透した時代もあつたと云うが、イワニウコフ以外には、革命前マルクス主義に近い立場で講義を行つた者はないようである。

一八八七年大學の第一回卒業生A・N・シーシキンが、リユドゴフスキー辭職の後をうけて、農業經濟學の講義を行つた。彼も亦二年間ドイツに留學した。彼の講義は、(一)農業生産手段の研究(農場の組織)、(二)經營および管理の三部から成つてゐた。シーシ

キンは「農業經濟學入門」の著書がある。

一八八五年からA・F・フォルトナートフが農業統計の講義を行つた。彼には「歐羅巴の農業統計」なる著書がある。

一八九二年農業經濟學の教授に就任したI・A・スクヴォルツォフは、リヤシチニコによれば「農業經濟學の一般經濟的諸前提および理論經濟的內容を最も堅實に(組織學への序論以上に)展開した」と評されている。

ベトロフ大學の閉鎖とモスクワ農業專門學校の設立に伴い、多くの西教授は去り、一八九五年N・A・カルシエフが經濟學と統計の講座を、K・A・グエルネエルが農業經濟學の講座を擔當した。一九〇二年にはA・F・フォルトナートフも復職した。グエルネエルやフォルトナートフの農業經濟學の講義は、リユドゴフスキーとシーシキンの體系を踏襲したものであつたと云うから、革命前のモスクワ農業大學では舊派の農業經濟學が強固な傳統をなしてゐたことは明かである。

革命後も一九一九年までは従前のスタッフによつて經濟學と農業經濟學の講座が存置されていたが、一九二〇年以來學生中のプロレタリア部分の壓力によつて、一般的社會經濟的な課目の講義が増加され、その後講義の内容は屢々修正されて、次第に社會主義的な色彩を加えて來た。

一九二〇年には後にブルジョア修正派として追放されたコンドラチエフによつて、學内に景氣研究所が設立された。これは資本主義經濟の下における景氣調節の試みをソヴェート經濟の見透し

に適用せんとするものであつた。研究所は一九二三年財務人民委員部に移管された。

一九二九年には農業經濟學部は一三名の教授、一二名の助教授三五名の助手からなつてゐた。當時の部長は「小農經濟の原理」で有名なA・チヤノフで、教授の大部分はソ連農業における勤勞農民經營の獨自な發展の道を主張するチヤノフ派、ソ連における農業の資本主義發展の道を主張するコンドラチエフ派からなり、ともに農業の全面的集團化には反對であつた。一九二六年頃から附屬の農業經濟及び政策研究所と農業經濟學部の講座における自由な討論の形で、兩派に對する批判が始められ、いわゆる農業經濟學における家族的、勞働消費的學派および勤勞農民黨の指導の中心がここにあることが暴露された。

農業の全面的集團化は農業經濟學の講座の再檢討を要求し、その結果、社會主義農業企業組織、農業統計、農業の計畫化と經濟の講座がこれに代つて新しく設置された。なお經濟學の講座はS・M・ブウチャトオの指導の下に活動を續けている。

社會主義企業組織講座。この講座は社會主義農業企業を科學的に組織し得る幹部が必要となつたために生れたものである。當初教授はコンドラチエフ、チヤノフ派が多數であつたが、學生は内亂戦の勇士や社會主義農業組織の實際家が主であり、彼等は講義に満足することが出来ず、一九二四年にソフホーゾの組織に關する研究會を作つた。これが發展して翌年にはソフホーゾ並びにコルホーゾのゼミナールが設置され、一九二八年に兩者が合體

してこの講座となつたのである。當時ソ連では未だブリクマンの「農業經營經濟學概論」などが教科書として使われているような状態であつた。

講座はソフホーゾ、M・T・S、コルホーゾの組織の問題を含んでゐる。一九三四年からは總ての農業高等學校に同一の講座が設置されることとなつた。講座は一九二八、二九、三〇年にわたり穀物トラスト幹部の養成に大なる役割を果した。また講座はコルホーゾ議長の再教育を援助している。

一九四〇年の講座主任はC・G・コレスネフ教授で、他にV・N・ルウブコ教授がいる。

社會主義農業の經濟と計畫化講座。この講座の設置されたのは一九三三年である。以前には農業の地域區分、一般および特殊計畫化、特殊部門經濟學の講義が行われていたが、社會主義農業の計畫化の方法論上の個別的な問題が解明されたに過ぎず、農業經濟の理論は農業經濟學の講座で受持されてゐた。

この講座の課題は、國民經濟計畫化の理論・歴史・方法、農業計畫化の方法、社會主義農業經濟の研究にある。講義は、國民經濟計畫化概論（一般的理論的部分）と農業の經濟と計畫化（特殊部分）の二部に分れてゐる。M・M・ソコロフ教授が第一の部分の講義を擔當している。

講座は理論的研究の外に、農業計畫化の方法に關する實習を行ふ。實習は地方および州の資料を用いて行われ、學生達は自ら主要農業生産部門の發展計畫を作成するのである。

統計講座。ペトロフ大學における最初の統計學の講義は一八七三・七四年にI・I・イワニウコフ教授によつてなされたが、これが獨立した講義となつたのはフォルトナートフが就任してから以後であつた。フォルトナートフはペトロフ大學の閉鎖まで統計學の講義を續けたが、彼の仕事は地方自治體の統計家に非常な影響を與えたと言われている。

モスクワ農業專門學校では經濟學の教授カルイシェフと、農業經濟學の教授ヴェルネルが統計の講義を行つたが、二人とも經濟學者と云うより寧ろ統計學者と云うべき人であつた。この二人を初めとし、爾來モスクワ農業大學で統計學を講義した人は、殆ど地方自治體で統計の實務に従事した経験のあるものばかりであつた。N・A・カルイシェフの統計上の業績は、レーニンによつて「ロシアにおける資本主義の發達」や「わが工場統計の問題」によつて「などで批判的に利用されている。

一九〇二年にはフォルトナートフが復職して、一九二五年まで統計の講義を續けた。

一九二〇年からP・A・ヴィフリヤエフが統計學の講義を擔任した。彼も亦豊富な統計實務の経験を持つていたが、彼の農業問題に對する態度は典型的な人民主義者のそれであつたと云う。

一九二五、六年頃から度々農業經濟學部に農業統計學科の設置が計畫されたが、遂に實現の運びに到らなかつた。

一九二八年ヴィフリヤエフの死後、現學長V・S・ネムチノフが統計學の教授になつた。彼も亦永く地方統計局で働き、一九二

六年からは中央統計局の參與として農業統計を主管し、一九三二年まで國民經濟計算局とゴスプランの業務を兼務していたし、現に學士院經濟研究所の統計部の指導者でもある。

ネムチノフは一九二六——二八年ソヴエート農村の階級分化の統計調査を指導した。またネムチノフの穀物と飼料のバランスに關する業績はスターリンによつて「穀物戰線」「ソ連の農業政策によつて」、十八回黨大會報告などで高く評價されている。

ネムチノフの指導の下に一九二八、二九、三〇年に互つてソフホーズ、コルホーズの第一回の全面的な調査が行われた。

一九二九年ネムチノフが實驗した收穫測定法は一九三二年以來廣く採用されている。ネムチノフが「農業統計とその一般理論」なる著書を發表して一九四六年スターリン賞を授與されたことは有名である。

全面的集團化は統計學の講義の再檢討を必要とした。一般的統計の講義は經濟學部のみで行われ、農學部・畜産學部では總數統計の講義がなされることとなつた。一九三九年から農業における計算および簿記の特別講義が企業組織の講座から移管された。これと關連して統計講座はコルホーズの簿記的分析を行つてゐる。

一九三五年には講座に附屬して統計研究員の制度が設けられた。その業績の一部である「ウオロネージ州イリツチ名稱コルホーズ」(M・P・トルウブヌツク)は、坂井砂治氏著「ソヴエート農家の實態」に部分的に紹介されている。

また講座では農業におけるスターノフ勞働者の經驗の一般化

(全連邦農業博覧會の材料に基く)ならびにコルホーズにおける蓄積過程の特徴づけ(コルホーズ經營の總記的分析の經驗)に關する研究が行われた。

附記

(一) 本稿執筆後、杉野忠夫氏「ソヴェット・ロシアの農業經濟研究所」(農業經濟研究、第二卷第三號)、磯邊秀俊氏「ロシアにおける農業經營學の進展」(農業經濟研究、第五卷第二號)、並びに昨年十月に開かれたソ連邦學士院經濟研究所の學會議事録を讀んだので、更に若干の蛇足を加えておきたい。

チアヤノフを中心とする新派の農業經濟學者が活動を開始したのは、一九〇五年のストルイビンの農業改革以後のことであつたと考えられる。チアヤノフはフオルトナートフの弟子で、一九一三年から一九三〇年頃までモスクワ農業大學の農業經濟學部長を勤め、また一九二〇年に同大學に設立された農業經濟・政策研究所の所長を兼ねていたし、革命初期には農業人民委員部次長や農業協同組合中央會議議長などの任につき、農政方面との關係も深かつた。農業經濟・政策研究所のスタッフには、先にあげたチエリツエフ、マカロフ、コンドラチエフ等一連の人々の外に、メンシエヴィキの農業理論家マスロフ、コム・アカデミー農業部長クリツマン、ボルシェヴィキ左派の學者オシンスキーが加わり、ペルリンのエーレボ、コペンハーゲンのカボット、プラーグ大學のブロリツクも名を列ねていた。なお杉野磯邊兩氏の記述には、農業經濟・政策研究所の外に農業經濟學研究所なるものが

みられるが、兩者は同一物で、露語文獻によると農業經濟・政策研究所が正式の名稱ではなかつたかと想像される。

モスクワ農業大學に集つていた農業經濟學者の多くは、リヤシチエンコも「主觀的・心理學的」と批評しているように、オースタリイ學派、英米學派に一般的理論的前提を求め、直接的にはドイツのエーレボ、フリンクマン、スイスのラウル、更にアメリカの諸學者の新しい經營學の影響を受け、ロシアの條件に應じて小農經濟についての獨自な研究を進め、家族的・勞働消費的學派或は生産組織學派と呼べる一派を形成していた。彼等是一九二〇年代に農業經營や農業生産費について多くの業績を發表している。後に國外に去つて經濟計算に關する著書で有名になつたベテルブルグ農業專門學校のブルツクスもこの派に屬する一人であつた。

以上にみられる如く、モスクワ農業大學には從來のオーストリア的な農業經濟學者が集り、農業の全面的な集團化以前には、彼等の學説がなお支配的な地位を占めていた。これに對抗するものとしては、マルクス主義學者を集めたコム・アカデミーの農業部、國際農業研究所があつた。

チアヤノフ、コンドラチエフ一派は一九三〇年前後に學界から追放されたが、この間の事情はあまり明かでない。一九三〇年に書かれた「農業指導の理論と方法」(磯邊杉野兩氏譯、日本譯に對するチアヤノフの序文などを見ると、農業の集團化に對して別に反對の立場をとつてはいないようであるが、當時チアヤノフの

唱えた「變數計量の理論」なるものは、全くの偽装であつて、彼は反革命的陰謀團體「動勞農民黨」のイデオログであり工業部面の舊技術的インテリゲンチヤの陰謀團體であり、外國資本の手先であつた「産業黨」とも連絡を持つていたと傳えられる。

この頃追放された著名な經濟學者には、チヤヤノフ、コンドラチエフ、ベザロフ、グロマン、ユーロフスキー、ワレンシュタイン、ルービン、リヤザノフ等がいるが、農業の全面的集團化を妨害したと云われるモスクワ農業大學の經濟學者とプハリシンの均衡論に基いて五カ年計畫のテンポを低く計上したゴスプランの學者達が主であつた。

中間が少し飛ぶが、昨年の學士院經濟研究所學會議事録の農業に關する部分を要約してみよう。農業部面におけるテーマは、コルホーズ、ソフホーズ、M.T.S.の實踐と結びついているが、研究は單なる記述が多く、一般に理論水準が低くて、ブルジョア科學の影響を脱却しておらない。社會主義農業經濟學の教科書が未だ一冊もないことがこれを最もよく證明していると云われ、今後の基本テーマとして次の如きものが取り上げられた。

「農業における社會主義的擴大再生産」、「コルホーズ生産の展望計畫」、「コルホーズ労働日の本質」、「コルホーズ労働の組織と支拂」、「コルホーズの所得分配」、「差額地代」、「共產主義への漸次的移行期における農業アルテリの發展の道と見透し」、また最近における注目すべき業績であるモスクワ農業大學の經

營學主任教授コレスネフの「社會主義農業企業組織」は、社會主義的大經營の優越がワレンシンの理論を借用して述べられていること、立地論においてブルジョア的な最小生産費の原則によつていことが批判され、チエリヤエフの「コルホーズ労働の組織と支拂」はチカロフ州のみの資料によつて立論している點が批判された。

更に、ネムチノフのスターリン賞を得た著作「農業統計とその一般理論」は、ブルジョア統計學の方法論への全面的屈服、經濟統計が數學にすりかえられている點について手痛い論難を蒙り、例えば、フィツシャアの撒布度分析が無批判にブルジョアの技術的新發見として取り入れられていることなどが指摘された。

農業經濟關係の教師や研究者の水準が低く、その養成のための努力も充分でないこと、例えば、モスクワ農業大學の二〇名の教師のうち、半数は學問的勞作を持たないこと、更に、農業においては企業指導者の養成が工業に比して立遅れており、現在の指導者の中には教育不足のため、複雑な大經營を指導し得ない者の多いことが明かにされた。

□ 本資料のモスクワ農業大學の農業經濟以外の講座についての紹介は、筆者の能力では到底消化出来ないで割愛したが、適當な紹介者が得らるれば、ソ連における農業全般の展望を知る意味で有益だと思ふ。

□ 校名の「名稱」と云う表現は日本語として熟さないが、便宜上、外務省、舊滿鐵の譯語に従つた。